# 2025 年度 福祉助成金（研究助成）完了報告書　提出用

公益財団法人 橋本財団
理事長 橋本 俊明 様

2026 年　5 月　15 日

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ふりがな | みまさかだいがく | | | |
| 大学<br>研究機関名 | 美作大学 | | | |
| 代表者名 | 役職名 | 准教授 | 氏名 | 菅原 明美 |
| 連絡先 | 住所 | 岡山県津山市北園町５０ | | |
| | TEL | 0868-22-7718 | | |
| | E-mail | a.sugahara2015@gmail.com | | |
| | URL | | | |
| 助成額 | 820,000 円 | | | |
| 研究要旨 | 本研究は、ひきこもり経験者をはじめとする当事者が主体となり、地域資源を活用・創出するプロセスを明らかにし、「地域資源創造ガイドライン」を開発することを目的とした。岡山県津山市をモデル地域とし、ピアサポーター、家族、専門職、行政等が参加する学び合いの場を通じて実践を展開した。その結果、「語り合い・分かち合い・学び合い」を基盤とする活動から、居場所づくりやネットワーク形成等の多様な資源が創出された。当初はインフォーマルなピアサポートに焦点を当てていたが、実践の蓄積により、その機能が障害福祉領域におけるフォーマルなピアサポートにも共通することが示唆された。そこで 2025 年度には対象を岡山県域へ拡張し、アンケート調査を実施した結果、支援の質の向上とともに、役割未確立等の課題も明らかとなった。 | | | |
| 研究の目的 | 本研究の目的は、ひきこもり経験者等の当事者が主体となる活動を通じて、地域資源がどのように創出されるのかを明らかにし、その実践を基にガイドラインを開発することである。近年、専門職中心の支援から、当事者を含めた協働的支援への転換が求められている。本研究では当初、当事者同士の関係性に基づくインフォーマルなピアサポートに着目していたが、実践の展開を通じて、その機能が制度的に位置づけられたフォーマルなピアサポートにも共通することが示唆された。そこで、ひきこもり支援にとどまらず障害福祉領域を含めた横断的視点から、ピアサポートの意義と課題を明らかにすることを最終的な目的とした | | | |
| 研究の<br>実施方法 | 本研究は、岡山県津山市をモデル地域とし、参与的アプローチにより実施した。ピアサポーター、家族、専門職、行政関係者等が参加する学びの場や運営会議を継続的に開催し、「語り合い・分かち合い・学び合い」を基盤とした実践を展開した。具体的には、家族教室や交流会等を実施し、当事者の語りに基づく関係性の形成と地域資源創出の過程を検討した。さらに実践の知見を踏まえ、2025 年度には対象を岡山県域へ拡張し、障害者ピアサポート研修修了事業所を対象としたアンケート調査を実施した。選択式回答は単純集計、自由記述は内容分析により整理し、両者を統合的に解釈した。 | | | |
| 研究の成果 | 本研究により、当事者主体による地域資源創出のプロセスが明らかとなった。実践を通じて、居場所づくり、講演活動、ネットワーク形成など、多様な資源が創出された。またアンケート調査から、ピアサポーターの関与により、相談しやすい関係性の形成、当事者理解の深化、組織文化の変化が促進されていることが確認された。一方で、役割の曖昧さや職員との関係調整、制度との不整合といった課題も明らかとなった。さらに、ピアサポートはインフォーマル／フォーマルの区分を超え、当事者性に基づく関係性を基盤とする共通構造を有することが示唆された。 | | | |

| | |
|---|---|
| 研究の成果の公表状況<br><br>今後の公表予定について | 本研究の成果は、学会発表および紀要論文として公表する予定である。また、ピアサポート研修後の事業所における変化に関する分析結果についても、学術誌への投稿を予定している。一方で、本研究は地域資源創造の実践に関する知見を得るに至ったものの、実践の多様性や地域特性、インフォーマルとフォーマルの関係性の統合の難しさから、汎用的なモデルの構築には至らなかった。このことは、ピアサポートが関係性に依拠する実践であるがゆえに、単一のモデルとして固定化することには限界があることを示している。今後は、事例の蓄積と比較検討を通じて、段階的な理論化とモデル構築を目指す。研究の進行に伴う計画の見直しにより一部経費が未執行となった。本研究の経験を踏まえ、今後はより精度の高い予算計画と執行管理に努めたい。 |

**＊2026 年 5 月 31 日締切です。必要事項を入力のうえ Word ファイルをメールにてご提出ください。**